



お父さんの同僚とのふれあい（本文中に関連記事があります）

目次／contents

特集「hello 船場。」……………

大阪事務所移転顚末記

オフィスプランニングチームの270日間の格闘

／オフィスプランニングチーム 鮎子田稔理 ②

リバウンドしない文書ダイエットに挑戦

／オフィス環境・働き方チーム 江藤慎介 ③

書類の山との闘い

／移転計画チーム 柳井正義

顚末記番外編 移転カウントダウン

／移転情報発信チーム 中村孝子 ④

ひと・まち・地域……………

地域から少子高齢化への対応を考える（その17）～企業誘致が
成功した人口増加自治体とその条件～

／森脇宏 ⑤

伝承譜その4 学研アーカイブと地域プロジェクト立ち上げ

／三輪泰司 ⑦

きんきょう……………

空き家活用による地蔵盆の活性化！

／嶋崎雅嘉 ⑭

「冒険・探検・オープンアルパック！」開催しました

／依藤光代

うまいもの通信……………

黒くて丸くてズッシリ重い「なす」

／山崎将也 ⑮

まちかど……………

「延命新地」昭和のノスタルジックな路地を探访して

／水谷省三 ⑯



大阪事務所移転顛末記

hello 船場.

事務所移転プロジェクトチーム

前号でもお知らせした通り、大阪事務所は船場に移転しました。今号では、今回の移転の顛末を各プロジェクトチームからご紹介します。

ニュースレター編集委員会



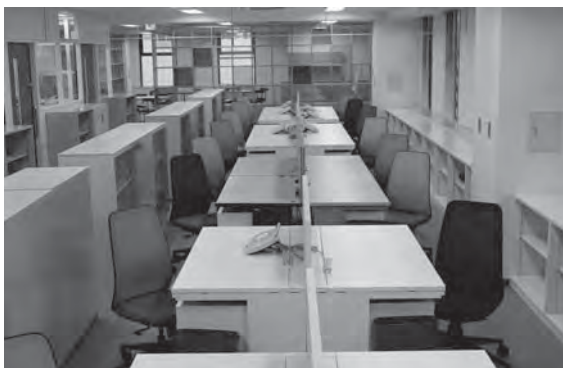
オフィスプランニングチームの 270 日間の格闘 オフィスプランニングチーム／鮎子田稔理

移転が決まり、新オフィスのプランニングについては、建築プランニングデザイングループが担当することになりました。

新オフィスでは個人席周りを省スペース化し、その代わりにエントランスや所員交流スペースを充実させるという考え方にに基づき、Aプランから始まり、委員会や役員会に諮りながら最終的にはJ-9というプランで落ち着きました。

デザインテーマは「秩序ある混沌」です。

新しく設置する間仕切り壁のベースはオフホワイトですが、ドアにはそれぞれ日本の伝統色を採用し、アクセントカラーとしました。エントランスはアルパックブルーとして「サックスブルー」。会議室の扉は「猩々緋色」（しょうじょうひいろ）、緋色の中でもとくに強い調子の黄みの赤です。エントランスから執務スペースへ入る部分には「鶺鴒色」（ひわいろ）を用いました。鳥の鶺鴒の羽毛を模した明るい黄緑色で鎌倉時代の武士の礼服である狩衣の色のひとつとして、「布衣記」にも登場する色です。



コピー室には「縹色」（はなだいろう）。縹色は古くから知られた藍染めの色名のひとつで、日本書紀や延喜式にも記載されている色です。事務所の一番奥の暗い倉庫の扉には、華やかでありながらどこかノスタルジーを感じるように「菜の花色」を採用しました。

所員交流スペースを囲む棚の仕切りは透過性をもたせるためにアクリル板としましたが、ところどころにカラーアクリル板を用いました。

今回、所員とアルバイト全ての椅子を新規購入しました。色は背の色が7色、座の色が18色でその組み合わせは最大126通りになります。全体をひとつのパターンにするのか、グループで分けるのか、かなり迷いましたが、発注のタイムリミットまであと1日というところで、椅子の品名「personarity」に因み、「一人ひとり好きな組み合わせを選ぼう」ということになり、急遽全員からメールや口頭で希望を募りました。

棚は既存の棚を利用しましたが、ほとんどは四半世紀以上使っている棚で、色もまちまちでしたので、木調の天板を新規購入し、既存棚の上に載せました。

全体としては落ち着いた空間の中に、様々な個性や物語が潜んでいるというオフィスでありたいと願っています。





リバウンドしない

文書ダイエットに挑戦

オフィス環境・働き方チーム／江藤慎介

当チームに与えられたミッションは大きく3つ。

①文書の削減及び管理ガイドラインの作成、②新しく出来る所員や社外との交流スペースの活用方法の検討、③それらを踏まえた“新しい働き方”の検討・提案です。しかし、1つ1つがあまりにも膨大な内容のため、まずは1つ目のミッション「文書の削減及び管理ガイドラインの作成」に集中して取り組むことになりました。

かつてのアルパックの事務所を訪問されたことのある方ならお分かりだと思いますが、どこのコンサルタント事務所とも同じように（！？）、棚の上だけでなく、所員によっては机の上や床の上にも文書が山積み。しかし、事務所移転のコンセプトは「様々なコミュニケーションとコラボレーションを創発するアルパック・コモン・プレイス」。このままでは、新しいプレイスも創出できなければ、コミュニケーションもコラボレーションもできそうにない、でもどうやったら短期間で解決できるのか……？

そこで今回、我々の強力なパートナーとして、コクヨ株式会社に協力を依頼しました。はじめに行ったのは、グランフロント大阪にあるコクヨ社の梅田ライブオフィスの見学（詳細は195号を参照）。ここは実際にコクヨ社の社員が働いており、働く姿を通じて顧客へオフィス空間を提案する場所となっています。文書がどこにも平積みにされておらず、中にはフリーアドレスが導入されたデスクもあり、あちこちに社員同士の交流を促す仕掛けのあるオフィスに、見学した私たちもビックリ。

各々が思い通りの理想像を描きながら、続いては文書管理ガイドラインの作成。文書管理を行うことで「付加価値の高いスペースの創出」、「業務の標準化、情報共有活用の促進」、「セキュリティの向上」を目指すことを確認し、具体的には文書の作成・保管・保存・廃棄の4つの文書ライフサイクルを意識した10以上のガイドラインを検討していきました。

また、並行して取り組んだのが文書の削減。新しいプレイスの創出に向けて、これまで各所員に割り当てられていた棚数を半減することを思い切って決定！さらに棚の上、机の上、床の上に文書を平積みにすることを禁止したことで、実際には1/3以下に減らさなければならない所員が大半でしたが、文書削減イベントを3回に分けて行うことで、何とか無事に引っ越しすることができました。今後は、残りのミッションにも取り組んでいく必要があります。

さて、今はまだ“キレイ”な（はずの）新事務所ですが、いつリバウンドしないか冷や冷や。そのため、現在もガイドラインの最終確認と文書管理体制の構築に向けて日々格闘中。新事務所へお立ち寄りの際は、文書が散らばっていないかチェックしてくださいね！



書類の山との闘い

移転計画チーム／柳井正義

移転計画チームの守備範囲は什器・備品・書類等の運搬でしたが、運搬作業自体はオフィス移転専門業者が行なうので、当チームの主な役割は業者が間違いなくかつスムーズに作業を行なえるよう社内準備を行なうことでした。オフィス移転に手馴れた業者の指示通りに準備を進めればむずかしくはないのですが、問題は物量と時間でした。

業者の当初見積では、オフィスにある書類等をすべて梱包すると段ボール2,000ケース分とのこと。大阪事務所はアルバイトも含め総勢で50名ほどです。一人40ケース梱包する勘定です。1ケース10分かかるとして400分、6時間以上は梱包にかかることになります。事前に梱包しようとしても、それだけの物量を積んでおく場所がありません……。

この問題は、プランニングチームおよびオフィス環境・働き方チームからの断固たる廃棄指令により、結果的にはクリアされました。実際に運搬された段ボールは1,000ケースほど。すなわち、半分の1,000ケースほどが新オフィスには運ばれず廃棄されたわけです。25年分の想いのつまった書類を捨てるのは耐え難いという所員も多かったでしょう。



が、よくぞ思い切ったものです。（注：単に廃棄するのではなく、スキャンして電子データ化し紙は捨てた、というものも少なくありません。）

時間的にも余裕がありませんでした。梱包物には新オフィスで迷子にならないよう行先アドレスを書いたラベルを貼っておきますが、この行先アドレスが確定したのが移転1週間前でした。これは、今回の移転に伴い、書類の保管方式の大転換（個人保管から共用保管へ）、これまでのオフィスにはなかった書庫・ライブラリーといった新機能の追加などにより、何をどこに保管すべきかなかなか決まらなかったためでした。

移転実行日は7月の3連休を選びました。前日の金曜午後から梱包を行ない、土日2日間で業者が什器・書類を運搬、3日目（祝日）に所員が開梱・セットアップ、3連休明けの火曜から新オフィスで通常業務ができるようにする、というスケジュールにしました。

そして迎えた移転当日。金曜の午後から梱包を開始しましたが、事前廃棄と先行梱包のおかげで、心配したほど時間もかからず順調に段ボールの山が積み上がり、夕方までには梱包がほぼ完了しました。保有書類量が膨大で下手すると徹夜で梱包作業かもと覚悟していた一部の所員についても、4～5人ばかりのチームワークで何とか21時ぐらいまでに作業を終えられました。業者による運搬は予定通り土日で完了し、月曜は新オフィスで指定の行先に積みあげられた段ボールを所員総出で開梱、収納。何も入っていないまっさらのキャビネットが手垢のつい

た書類であつという間に埋まっていくのをちょっと残念に思いながら、予定通り作業を終えました。



顛末記番外編 移転カウントダウン

移転情報発信チーム／中村孝子

各プロジェクトチームの取り組み報告からも想像できるように、日常業務を回しながらの移転作業は、山あり谷ありの苦難の道のりでした。ことに移転日が決定してからは、さらに時間に追われることになりました（笑）。

そんな中、移転に向けての気運を盛り上げるために一役買ったのがFacebook 移転カウントダウンのページ開設です。移転50日前にスタートした当初は、所員だけの参加でしたが、その後、各種勉強会、まちづくりや新事務所の工事の現場、アルパックOB、その他応援隊の皆さんと次々、参加いただきました。おかげさまでプロジェクトは、多くの皆さんとコミュニケーションを図りながら、何とか途切れることなく楽しく（冷や汗の日もありましたが）遂行することができました。そして、いよいよ移転を迎えた最終ページでは、新オフィスでの作業のようを動画でアップしています。「移転まであと〇日」と刻一刻と迫る日々様子は、現在もご覧いただけますのでぜひアクセスください。

カウントダウンにご協力いただいた皆さん、「いいね」をいただいた皆さん、どうもありがとうございました！

アルパック大阪事務所移転特設ページ

<https://www.facebook.com/arpakiten/>



移転まであと一日の集合写真



地域から少子高齢化への対応を考える その17

～企業誘致が成功した人口増加自治体とその条件～

代表取締役社長 森脇宏

普通の自治体にとって参考になる自治体

前々号（197号）では、「人口増加の参考になる可能性がある自治体」として、1995年から人口増加が継続しており、かつ昼夜間人口比率（夜間人口100に対する昼間人口の比率）が95以上（2010年）の基礎的自治体を抽出し、145の市区町村（東京都の特別区も含む）を挙げました。この中から、大都市圏というアドバンテージを持たない地方部の市町村を対象に、増加要因を考察します。なお、対象から除外する大都市圏は、首都圏（東京都、神奈川県、埼玉県、千葉県、群馬県、栃木県、茨城県、山梨県の一都七県）、中京圏（愛知県、岐阜県、三重県の三県）、近畿圏（大阪府、京都府、兵庫県、滋賀県、奈良県、和歌山県の二府四県）とします。このように大都市圏を除くと、69市町村が対象となります。人口増加の参考になる可能性がある145の基礎的自治体のうち、半数近くの69市町村ですから、地方部において人口面で頑張っている自治体数は、大都市圏と比べて遜色がないと言えます。

ただ、普通の自治体にとって参考になりにくい自治体は除くことにします。具体的には、社会経済的ストックが大きい地方中核都市等（県庁所在都市も含む）の16市と、自衛隊基地や大規模発電所等の特殊要因の影響が大きい9市町を除きます。こうして普通の自治体が参考になれる自治体は、44市町村に絞られ、これらについて分析を進めます。

人口増加自治体の多くは企業誘致に成功

こうした44市町村の人口増加要因について、それぞれの自治体の沿革、産業構造（業種別従業者数の構成比や立地企業等）を分析して考察すると、土地区画整理事業や埋立造成等の基盤整備が進められ、製造業をはじめ運輸業や卸売・小売業等が主要産業となっている市町村、すなわち企業誘致に成功した市町村が31市町村と最も多くなっています（図1）。戦後、全国各地で地域活性化のため数多く取り組まれた企業誘致が、一つのモデルを確立していると言えます。ただ、あれだけ多くの自治体が企業誘致に取り組んだにもかかわらず、地方

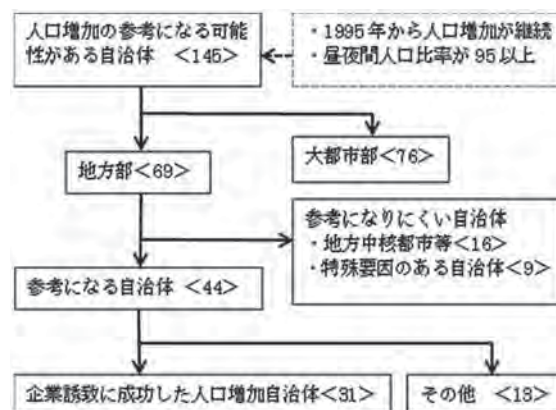


図1. 人口増加の参考になる自治体の抽出プロセス

部では31市町村しか、このモデルを実現できていないということは、企業誘致を成功させることは、何処でもできる訳ではなく、何らかの条件が揃うことが重要だと思われます。

ベッドタウンと企業誘致の組み合わせ

そこで、対象となる31市町村を眺めると、いわゆるベッドタウン的要素を持っている市町村が多いことに気がつきます。とは言っても昼夜間人口比率95以上の市町村を抽出しているのですから、単純なベッドタウンではありません。近隣の地域中心的な都市に、夜間人口の増加分をベッドタウン的に依存しつつ、同時に企業誘致によって昼間人口も増加させ、昼夜間人口比率95以上を確保しているようです。したがって、近隣の依存できる中心都市がなければ、少なくともこれだけの夜間人口の継続的増加は実現できなかったであろうと考えられますし、昼間人口（従業者）の一部も中心都市の需要に対応していると考えられます。

ベッドタウン的要素の強い自治体を「依存型」、そうでない自治体を「自立型」と仮に呼び、次頁の表1に整理したところ、21市町村が依存型に該当しました。すなわち、近隣に依存できる中心都市が存在することは、企業誘致で成功する重要な要因になりそうです。

なお、ベッドタウンの定式化された判断基準は存在しませんので、本稿では仮に国勢調査（2010年）を用いて、①常住就業者の5割以上が流出する市町



村、②最多流出先への流出率が2割以上の市町村、のいずれかに該当すればベットタウンとして判断することにしました。また、企業誘致に成功した31市町村の中には、企業誘致とは関わりのない農業等も主要産業となっている自治体も含まれています（表1の※印）。このような自治体では、企業誘致以外の成功要因も想定され、より多面的な要因考察が必要であり、今後の考察課題だと思います。

高速道路は不可欠な要素

さらに、この企業誘致が成功した人口増加自治体を日本地図に落とすと、見事に高速道路沿いに位置する市町村に限られています（図2）。したがって、高速道路抜きに、企業誘致に成功することは極めて難しいと認識すべきでしょう。しかも、この地図を眺めると、該当する多くの市町村は単なる高速道路沿いではなく、国土の主軸沿いに位置していることがわかります。そういう意味では、国土の主軸から少し離れた茅室町（北海道）、東

表1. 企業誘致が成功した人口増加自治体のタイプ分類

タイプ	自治体名
依存型 (中心都市) <21>	茅室町※(帯広市)、矢市町(盛岡市)、名取市(仙台市)、岩沼市(仙台市)、大和町(仙台市)、西郷村(白河市)、聖籠町※(新潟市)、白山市(金沢市)、川北町(白山市)、宮田村(駒ヶ根市)、清水町(沼津市)、長泉町(沼津市)、里庄町(笠岡市)、宇多津町(坂田市)、筑後市※(久留米市)、新宮町(福岡市)、久山町(福岡市)、粕屋町(福岡市)、嘉島町(熊本市)、時津町(長崎市)、浦添市(那覇市)
自立型 <10>	苫小牧市、東根市※、佐久市※、袋井市、富士市、裾野市、吉田町、東広島市、鳥栖市、大津町

注：※印の自治体は、農業が主要産業に位置するなど、企業誘致以外の要因も考えられる自治体である。

根市（山形県）、聖籠町（新潟県）、佐久市・宮田村（長野県）、白山市・川北町（石川県）、時津町（長崎県）などはレアケースかも知れず、これを教訓として活かすことができれば、重要な参考情報になると思われます。

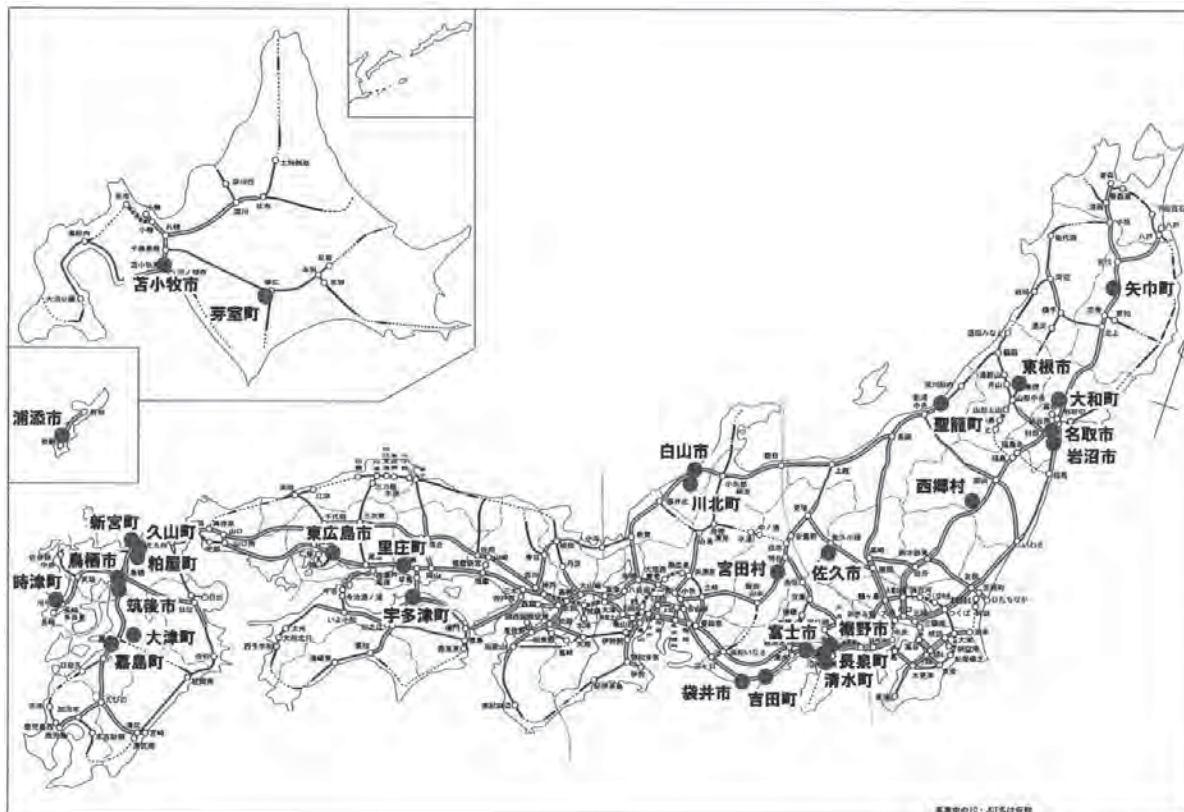


図2. 企業誘致が成功した人口増加自治体の位置と高速道路網



伝承譜 その4

学研アーカイブと地域プロジェクト立ち上げ

名誉会長 三輪泰司

「学研都市アーカイブ（仮称）」が動きだしました。月1～2回のペースで、国立国会図書館関西館で、資料の整理作業をしています。

久しぶりの関西学研都市。精華大通に立つと、昔訪れたノースカロライナのリサーチ・トライアングル・パークと代らない風景です。ほぼ10分間隔で新祝園駅との間をバスが走り、記念公園、病院、スーパーマーケットも整っています。秋になるとメタセコイアの並木が見事な紅葉になるでしょう。

コトの発端 資料の特徴とアーカイブ構築

2015年12月、“奥田懇談会”の提言とりまとめから展開まで、中枢を担ってこられた後藤邦夫先生が、関西学研都市建設プロジェクトに関する文書・資料をしかるべき機関へ寄贈し、後世の調査研究のために役立てたいと提起され、私どもも協力要請を受けました。

今年2月、国立国会図書館関西館が受入れの検討を開始されました。

3月8日、国立国会図書館関西館で、片山信子館長と後藤先生のイニシアチブのもと、推進機構の瀬渡比呂志常務理事も立会い、「学研都市アーカイブ」構築を目指して最初の会議が持たれました。まず、後藤先生はじめ、私ども－三輪・霜田が保管している資料を関西館へ集積し、分類・整理を始める

ことになりました。

関西館では閲覧室に開架式の「学研都市コレクション」のコーナーを用意されています。アルパックでは学研都市の新たな都市創造に関わっている京都事務所・松本明所長が支援しています。関西館へ集積した資料類は段ボール箱20以上になりました。館は3階東端に作業スペースを用意しました。精査して時系列的に整理している段階です。

初動期のアーカイブ 摸索からリサーチへ

資料には印刷文書と手書きの内部資料があります。資料の名称を仮に、三輪文庫・霜田文庫・後藤文庫としますと、かなり重なっていますが、おおむねこの順で“奥田懇談会提言”の“それ以前・真ん中・それ以後”となります。

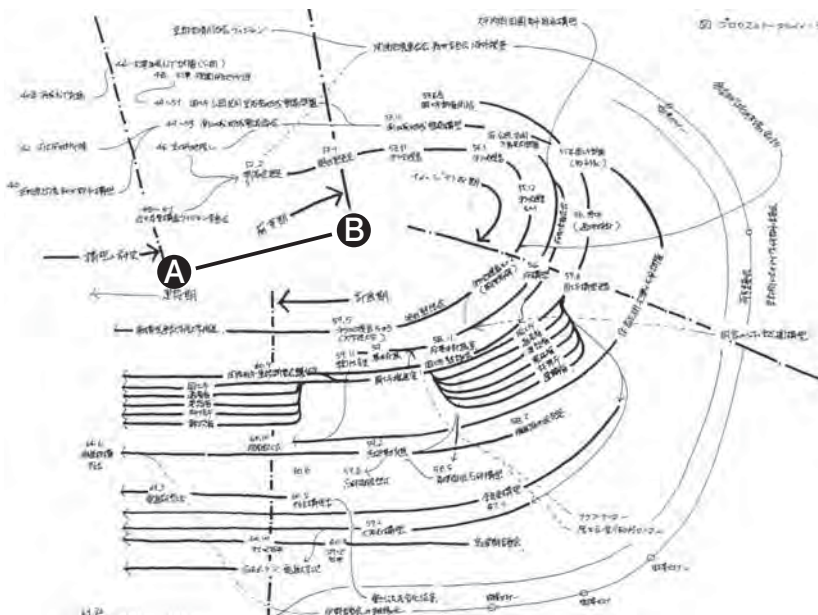
霜田稔さん作成の“学研推進チャート”と言うべき模式図があります。

A点から始まって、右へ時計回りで調査と事業が広がって行きます。私が学研構想に関わったのは、1977年（昭和52年）2月5日上高野のお宅で、奥田東先生に“秘書官”に任命された日としています。この初動のA点です。“それ以前”もあります。岡本道雄先生曰くところの「神代」の時代です。

“三輪文庫”には初動の点から準備会段階の約1年半と、1978年8月31日の関西学術研究都市調査懇談会、いわゆる奥田懇談会発足、12月5日の第1次提言、翌1979年7月8日、第2次提言。おおよそのあたり、B点の所までの資料が、B4版バイナダー8つと、B5版バイナダー3つに詰まっています。アーカイブの文献・資料から、関西学研都市構想の意義と特徴、地域プロジェクト初動期の方法について、読み説いてみます。

まずは、最初のモチベーションから。

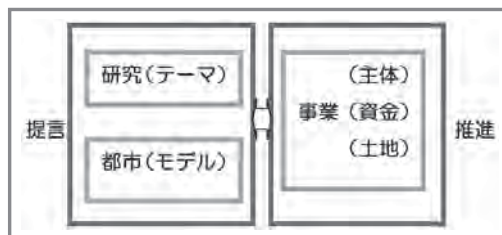
2月5日、奥田先生にそもそもの始まりとアクションをお聞



学研推進チャート



国立国会図書館関西館



構想提言と事業推進

きました。最初のモチベーションは、京都大学の将来計画に挙げられた研究施設の立地選定でした。理工系の研究は国際競争です。宇治キャンパスも満杯。次世代ヘリオトロンも置く場所がありません。第19代岡本道雄総長は農学部の澤田敏男教授を責任者に任じ、候補地の選定を進めました。滋賀県や信楽町から誘致の働きかけがありました。帯に短し、襷に長し。祝園の弾薬庫も候補地に上げると、防衛施設庁に“代替地を用意して下さい”と言われました。

候補地は田辺、精華地域に絞られました。状況がリアルになり、現役教授が動き難くなったため、第17代総長・奥田東名誉教授にお願いすることになったという次第でした。

はじめが肝心。研究学園都市なるものの造り方そのもののリサーチから始まりました。まず、基本理念です。

理念の確立 人類の未来へ、日本が近畿で

奥田先生が、構想の動機を聞かれて、ローマ・クラブの「成長の限界」に触発されたとおっしゃったことは、記録にも書かれています。

1972年5月に発表された「成長の限界」は、僅か3ヶ月後に大来佐武郎氏の監修で邦訳が出版されています。このままで進めば人類は21世紀半ばには成長の限界に到ると予測しています。幾何級数的に急増する人口に対して、食糧生産は算術級数的にしか増えない。農学者である先生は衝撃を受け、今、自分がなすべきことは何かを考え、それは研究開発である、京都、京大にこだわらず、人類の未来のために、イノベーション・センターを造ることであると心に決め、行動に移されたのです。

私は1976年7月から、京都東ロータリークラブの幹事を務めていました。奥田先生は75年末に「金曜会」の会長になり、例会日が重なるので退会されましたが、1964年以来の会員でした。ムーンバット社長の河野卓男さんは1970年以来の会員でした。私は1968年10月、河野さんに、代表理事を務めておられた、繊維産業団地建設組合（現・ファッション産業団地組合）の技術顧問に任命されていまし

た。元々は西山卯三先生の紹介です。

因みに私は1967年11月の入会ですが、その時、16代平澤興、17代奥田東、推薦者の18代前田敏男、19代岡本道雄と、なんと4人もの現・元京大総長がおられました。研究学園都市構想の理念と方法について、奥田先生・河野卓男さんと、毎週金曜日の例会場で、議論していました。

この頃—1977年3月、河野卓男社長のムーンバット株式会社は、大阪証券取引所市場2部株式上場しています。河野さんはインサイダー取引に厳しい姿勢をお持ちで、職業倫理に厳しく、学研都市構想についても「南山城で、一坪たりとも土地を買わない」と誓われていました。学研都市構想の理念の根底に脈打っているのは、平澤興、奥田東、河野卓男と繋がるロータリーの奉仕の精神、職業倫理なのです。

学研都市構想は、まぎれもなく一大地域プロジェクトです。利権や物欲に紛れ込まれなかったのは、その初動から奉仕の理想とともに、ロータリーの「行動規範」が根底にあったのです。

言葉に現していませんが、身に沁みついているのです。すなわち—“真実かどうか、みんなに公平か、好意と友情を深めるか、みんなのためになるかどうか”です。学者であるか、財界人であるかといった単眼で決めてしまってはならないのです。“真実探求”の姿勢は、次の、場所・ロケーションのリサーチにも貫かれています。

人口動態を見る エネルギーのポテンシャル

「木津・加茂ニュータウン建設基本構想」いわゆ



「成長の限界」と20年後のレポート

る“2K計画”は、1973年5月に報告書が出来ています。学研都市構想開始の4年前です。それ以前から京阪奈丘陵・南山城地域を歩きまわっていました。

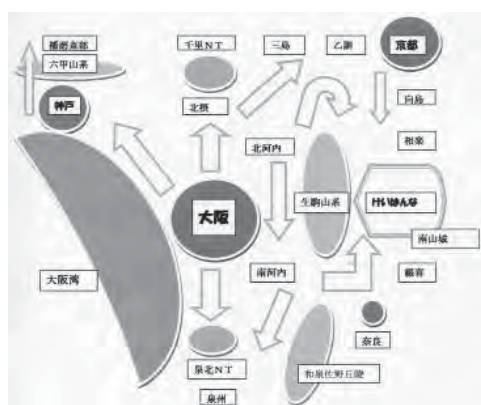
“場所性を読む”場合の“真実を探究する”とは、物的な地形・地質、河川・植生等と、人的な人口・産業・歴史・文化の双方、高次広域・長期と、ローカル・短期の双方、を“複眼”で見るといことです。1960～70年代という時代相の中でどうだったのでしょうか。大都市への人口集中が、都市内での自然増を導き、住宅・宅地需要のポテンシャル・エネルギーが高まっていました。

人口増を動態的に見ましょう。地形と鉄軌道に関係します。東京を中心とする関東圏と違って、近畿圏の特徴は都市の近くに「山」があることです。

“時計回り”と名付けましたが、人口増の波は、大阪を中心に、北摂から始まり、東の茨木・高槻、三島へ、淀川を渡って門真・寝屋川・枚方、北河内へ到り、生駒山系にぶつかって、南下し、南河内から泉州へ廻ります。このエネルギーを公的開発で受けたのが、大阪府企業局による千里ニュータウンと泉北ニュータウンです。

次に大和川に沿って、生駒山系を回り込んで、西奈良から南山城の相楽へと、北から回り込んだ波が京都のポテンシャル・エネルギーと併せて綴喜へ到り、京阪奈丘陵でぶつかります。大阪府企業局は第3のニュータウンを企てましたが、大阪府域からはみ出しますので足ふみしました。これが、1970年代後半期の近畿圏の姿でした。（下図）

“2K”計画は、日本住宅公団関西支所の調査で



近畿圏の人口動態モデル図

す。公団や民間デベロッパーは、見当をつけずに土地を買ったのではなく、需要を調べていたのです。木津川流域を歩き回って分かった第一の問題は治水です。木津・加茂地域では新川・大谷川・赤田川・井関川等々、内水域の対策が不可欠です。改修に膨大な費用を要します。

第二の問題は地方自治体の財政負担です。人口増は、地方自治体にとって、保育園・幼稚園・小学校・中学校の用地から施設建設に追われることになります。

第三の問題は都市近郊型の農業と住宅地の共存です。加茂の鹿背山の果樹園農家は、芸術作品のような柿をつくっています。

ハウジング・エステートだけでよいのか。京都府の総合開発審議会でも議論になっていました。こうして「研究」のモチベーションと、「都市」づくりのモチベーションが結びつきました。強くて柔らかい「理念」によって。

次は、“造り方”すなわち「構想推進」のリサーチです。原則は構想の始めから“産官学連合”であると打ち出されていました。我が国では本格的な前例がありませんでした。

東では、筑波研究学園都市が先行していました。1963年9月の閣議了解で決まり、1980年3月には概成を見ます。その目的は、科学技術の振興と、この方が事業推進のドライブになったのですが、東京の過密対策です。必ずしも東京に立地する必要のない試験研究機関を移すことでした。移転したのは、主に国の機関です。

公式記録もあります。前後6回、筑波へ行きましたが、初動つまり誰が“言い出しっぺ”なのか、理念と方法はどのように闘わされたのか、どのように合意形成を進めたのか、よく分かりません。参考にならないということです。

一点の火花 ロメオ・ゲストの情熱

“奥田懇談会”が動き出したものの、悩んでいた時、アメリカ在住のさる研究者に「最先端研究機関：リサーチ・トライアングル・パーク」（以下RTP）を訪ねてはどうかと、お勧めを受けました。



ロメオ・ゲストさん(左)

学研アーカイブにはありませんが、この機会に付け加えます。

1979年10月、京都信用金庫の榊田喜四夫理事長が主宰されたMITでのサマーセミナーに参加し、ノースカロライナへ足を伸ばしました。ラッキーにも“その人”に会うことができました。ノースカロライナは、ロメオ・ゲストというアイデアと情熱、そして奉仕の精神を持つ男に恵まれたのでした。RTPのガバナース・インに現れたのは、小柄で穏やかな70歳過ぎの老紳士でした。

ノースカロライナの基幹産業は農業で、とても貧しかったのですが教育には熱心でした。80も大学がありましたがこの時代、教育を受けた人材は就くべき職場がなく、州外に機会を求めて出て行きました。産業基盤の改善が州の課題でした。このような背景に“歴史的モメント”がありました。1950年代中頃、全アメリカは“ポスト・スプートニク”という衝撃を受けました。そのベースは、ノボシビルスクを中心とする学術研究都市です。

ロメオ・ゲストはMITを“押し出し”で卒業したあと、祖父の代からのテキスタイル工場の近代化に腕を振るい、同級生のビル・サンダースとガーバンズ・ミルという会社の経営にも努めていましたが、ノースカロライナの生きる方向という“問題意識”を持ち続けていました。たまたま、カリフォルニアで企業とコンタクトしている大学の存在を知り、訪問した帰途、空港へ近づく飛行機から故郷を見て、州立大学のある州都ローリー、デューク大学

のあるダーラムそしてノースカロライナ大学のあるチャペルヒルを結ぶ三角の真ん中に、ユニークなイノベーションセンターをつくること、それは“リサーチ・トライアングル・パークだ！”だと光明を見つけたのです。彼はこのアイデアをパンフレットにまとめ、州のホッジス知事に説きました。

ホッジス知事は即座にこのアイデアを採りました。1956年のことでした。ゲストは各大学も説いて歩きました。アイデアはまだ具体的なものではなかったので、はじめは何のことか分からなかった大学もゲストの情熱で協力を約しました。1957年、知事は委員会を組織しました。始動のための費用、75万ドルは、ビル・サンダース、コール・ロビンスその他の企業人が調達し、足りない分は銀行から借りました。まず用地の手当てから始めました。当時、1エーカー240ドルくらいの土地4,000エーカーが確保されました。3つの大学がジョイントし、ホッジス知事の委員会はビジョンの具体化、マスタープランの作成に掛かりました。

まず、基本理念。それはイノベーションセンターです。これからはマニュファクチャよりリサーチであり、リサーチの如何によって生産性が決まります。次に立地。自然の環境につつまれて、専門的なリサーチの効率が上がります。

ホッジス知事は、ノースカロライナへ帰る前は、連邦政府の財務省次官でした。連邦政府はハイウェイの建設で支援しました。こうして、ノースカロライナは、「天の時、知の利」に「人の和」と、それを結ぶ「理念」を得たのです。それは一人の情熱、故郷への愛から始まったのです。

RTPに学ぶ 学研構想の特性を知る

関西学術研究都市のモチベーションも、イノベーション・センター創出です。リサーチが産業基盤の刷新を導く原動力であることは正解です。

ノースカロライナのRTPに学ぶには、Tar Heel Stateと呼ばれるこの州と、アメリカという国のなりたちについて知っておく必要があります。

「産官学連合」とは企業と大学を官一州が結んでカナエとなることです。



1984年6月28日に・朝日新聞

RTPはファンデーション(RTF)とインステチュート(RTI)を持っています。RTFは土地を保有して、民間研究所に貸し、RTIは、官・産の委託研究で成り立ち、大学との連携を担います。関西学研都市の特徴は、住居と一体性であり、12ものクラスターから成っていることです。規模も構造もユニークなサイエンス・シティです。

RTPは関西学研都市に比べて、コンパクトですが、必要十分な機能を持っています。事業、即ち収支バランスしています。アメリカのデモクラシーとプラグマチズムを学ぶべきです。

5年後の1984年9月、もう一度訪問しました。完成したリサーチ・パークになっていました。コンパクトだがダイナミズムがないように感じました。関西学研都市は、まるでアルパックの“小集団のアソシエイツ”のように、いろいろな個性あるリサーチ・パーク群が、競いあって進む方法で、“出来上がり”は見え難いですが、可能性が大きいです。

建設の方策は、研究投資を導くナショナル・プロジェクトでなければと確信しました。我が国が世界へ貢献する、国家的な「知」への先行投資です。

学研構想の始動

調査懇談会「事務局」の使命学研アーカイブに戻りましょう。

奥田懇談会の提言書をご覧になると、事務局は第1次提言から1982年12月の第3次提言(その2)―国際高等研究所の提案―まで“都市調査会”となっていることに気付かれるでしょう。そして、1984年4月の第3次提言(その3)―連合大学院の提案―では“地域計画建築研究所”になって、担当者はアルパックの霜田稔・山田克雄と関西情報センターの金繁千代美さんです。

何故、このようになっているのでしょうか。

財団法人都市調査会(豊崎稔理事長)と株式会社都市科学研究所(米田豊昭社長)は、同じ梅田の阪急グランドビルに入っていて“奥田懇談会”の第1回会議もここで開いています。

都市科学研究所は私たちアルパックにとって、先輩で、兄貴分で、商売仇で、ライバルで、一緒に勉

強会や懇親会もやる、そんな仲でした。

都市調査会の藤野良幸専務理事は、元建設省河川局、国土庁大都市圏整備局の調査官で、南山城を含む淀川流域の河川計画や環境管理など、随分ご指導を受けていました。

1978年8月31日の第6回準備会は、準備会としては最終になるので、事務局はアルパックの私と霜田稔京都事務局長、金井萬造総務部長が出席しました。そして、「調査懇談会」の委員人選と設置要綱を決定、併せて事務局を都市調査会にお願いすることで承認を得、藤野良幸専務理事・奈良忠常務理事が紹介されました。

こうして“奥田懇談会”は、同年9月14日に発足しました。第1次提言、第2次提言と進んだのですが、およそ5年後の1983年6月27日、都市科学研究所が倒産。都市調査会も破綻。事務局のお役目はアルパックが引き継ぐことになったのです。つまり、アルパックと私が事務局を担当していたのは、セルモーターを掛ける初動から走りだすまでと、奥田懇談会が役目を終える最終段階であって、主な時期の事務局は都市調査会で、奈良忠さんたちです。

私は準備会段階から、リレー競走のように第2次提言のあたりまで並走して奈良さんたちにバトンタッチしました。霜田さんは都市調査会の事務局へ出向の形で引き継ぎ、3次提言(その3)まで全うし、その後の展開を担ったのです。

1978年の日記を見ますと“11月24日、都市調査会で奈良さんと、第1次提言書の起草”とあります。奇しくも30年後の2008年11月24日、奈良忠さんが亡くなられたと、奥様から訃報を頂きました。

奥田懇談会は、第3次提言(その3)の「追記」で事務局の尽力を称え、都市調査会の解散を惜しみ、豊崎稔理事長、藤野良幸専務理事はじめ、皆さんへの謝意を表しています。

学研アーカイブはアカデミック・プランから、都市づくりプランまで、多くの叡智が集まった様子を、後世に伝えるでしょう。その陰で、埋もれていった人々の努力も想起して頂きたいのです。

“学研アーカイブ”から少々離れますが、何故こ





のことを強調しなければならないのか、そのワケを
伝承しておきましょう。

事務局の使命 シンクタンクの真髄

“奥田懇談会”は準備会から第3次提言（その3）
まで、その運営は何処からの資金援助を受けること
なく、自前で、ということは事務局の無償奉仕に
よって支えられていたのです。委員の先生方には僅
かなギャラでご奉仕頂き、交通費・会場費及び要約
版・合本を含め7冊の提言書の印刷費、すべてです。
アルパックは準備会段階の1年半で約660万円負担
しています。三輪・霜田等の人件費は別で。都市調
査会は、多分、3,000万円は負担していたでしょう。

初動の時期、「調査受託」を想定していましたが、
早々と意志を固めています。アーカイブの内部資料
にあります。77年5月11日の所内会議で、事務局
費用を算定し、一般管理費で耐えることを決めてい
ます。

特定のスポンサー・シップがなくとも、社会に有
用な政策提言をするのは、シンクタンク・コンサル
タント職能の本来の使命です。

シンクタンクの使命については、APEC 大阪の
時、けいはんなセンターで開かれた、アジア太平洋
シンクタンク会議で、日米の先達を例証してお話し
しました。1995年11月9日のことです。

アルパックは、準備会事務局を務めた1977年度・
第11期の収入は2.2億円、経常利益390万円、資
本金1,000万円で、まだ自己資本合計2,000万円弱。
これでは、とても“奥田懇談会”を支える力はない、
と判断して都市調査会にお願いし、受けて頂いたの
です。

私は都市調査会の理事も務めていました。ところ
が、都市調査会は、東京へ進出するので、私の理事
ポストを空けてくれとのことで学研構想発足前の
1976年末に退任していました。おかげで、経営破
綻の混乱に巻き込まれることは免れました。

都市調査会の経営破綻の原因は、東京進出など大
志志向による過剰投資ですが、奥田懇談会事務局の
負担を掛けていることが気になっていました。破綻
の数日前、藤野専務理事から電話で「1,000万円貸

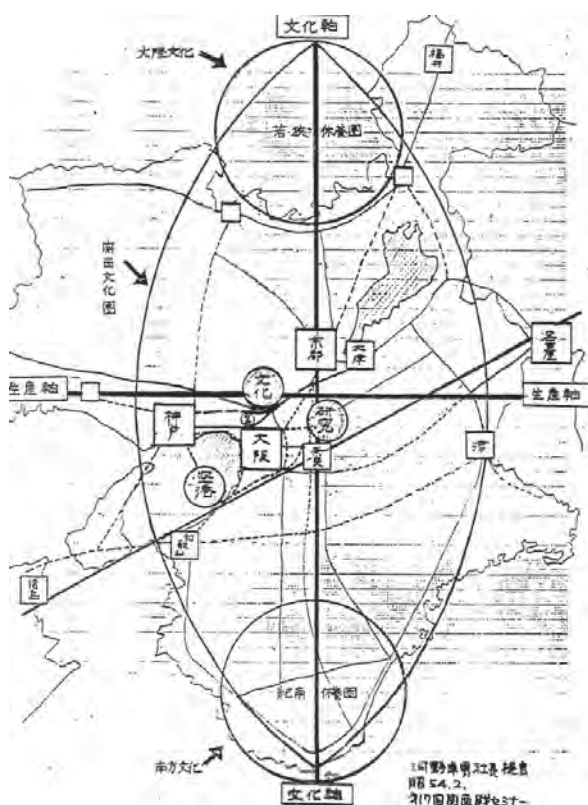
してほしい」と頼まれました。既に情報は入ってい
ましたので、これは還らないと覚悟して貸しまし
た。破綻の前日、そっくり返済されていました。

「信義には信義でもって応える」。藤野良幸・米
田豊昭両名の人間性に感服しました。

結局は、悲劇でした。倒産した企業の社員の人生
がどうなるか。社員たちに、あの悲哀を味わせては
ならない。心に誓ったのです。

アルパックは事務局を引き継ぎ、奥田懇談会の継
続を保障しましたが、経営に大きな負担となること
は避けられません。どこにも頼らず、自主自立を
守ってです。私は学研都市構想から離れて、まず、
大阪での受託業務の確保に専念しました。1984年
5月から半年掛けて、竹内義治・元豊中市長を大阪
府顧問に担いで、大阪市を除く全55市町村を回り
ました。

企業経営体の運命は、トップの“器量”に掛かっ
ていることは確かですが、代表者一人では開けま
せん。





調査懇談会

霜田さんは、学研構想に没頭していたように見えますが、その前に、京都府文化事業室のプロジェクト「ゼミナールハウス」に取り組み、その後、京都府の業務に道を拓きました。実務は事業団方式で改築がはじまった保育園とともに、建築チームが支えました。アルパックの基幹業務となる市町村総合計画から、琵琶湖東部、播磨内陸などの広域計画へ拡げた糸乗さん。中城湾港、大阪海の公園に始まり、小樽港から港湾再開発の柱を建てた金井さんは30歳代でしたが総務部長も兼ね、財務力の強化にも努めました。

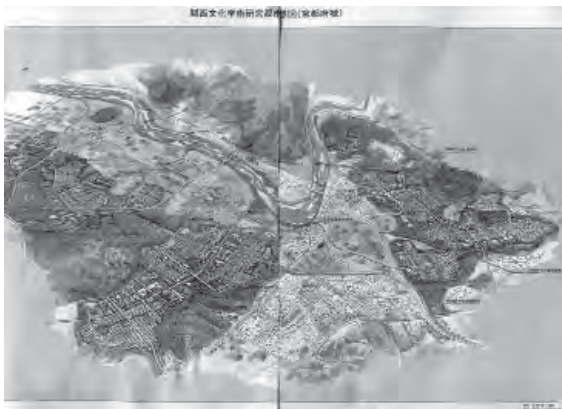
「半年くらい受託がなくとも食ってゆけるように」と別途積立金を“強蓄積”したのです。経営としては、大ピンチだったのですが、逆に、この時期に強靱な財務体質を造りあげたのです。

実際には、関西学研都市構想の調査・計画委託は、早くも1977年12月、国土庁等からはじまり、都市調査会が受託しています。本格化したのは、1980年代で、圧倒的にアルパックが受託しています。

先日、アルパック大阪事務所が船場へ移転しました。披露パーティに大勢のお客様がお越し頂きました。皆さんに見つめられています。ご恩ある物故者、よきライバルであった方々に感謝申し上げます。

将来への願い 文化をお忘れなく

呼称について。初動期、京阪奈研究学園・関西研究学園都市とまちまちでした。「関西学術研究都市」と決定したのは、1978年6月7日、京都府の土木建築部長室で、佐藤尚徳部長、斎藤企画調整室



構想図・京都府域

長と3人で決めました。翌日、林田知事が上京されるので、名称を確定しようと。「文化」が付いたのは、1979年5月27日、いわゆる奥田東・梅棹忠夫会談の後です。奥田懇談会は、最終提言まで「関西学術研究都市調査懇談会」で通しています。

関西文化学術研究都市建設促進法公布から来年で30年。今年の3月、「けいはんな学研都市・新たな都市創造会議」が創設されました。国土形成計画も出ました。

前ページの図は、1985年2月、第23回関西財界セミナー「21世紀への挑戦」で、関西学研構想のプレゼンテーションをした時のものです。河野卓男さんと「日本列島の東西方向は“生産軸”」。対して近畿では若狭から熊野へ到る南北方向の“文化軸”がある。「けいはんな」はその結節点にある、と絵にしたのです。日本中、四国・中国、中部。関東、東北にも「文化軸」があります。それは真実です。複眼で見ようと提起しました。

さて、リニア新幹線を見るまで生きていないでしょうが、奈良と京都を結ぶ「文化」が華開くことを願っています。もう一つ、伝承しておきたいのは、長期的展望での“ナショナル・セキュリティ”の観点です。2次提言補足、関西学研都市建設の意義と役割に記しています。国立国会図書館関西館はその先駆的モデルというべきです。

むすびに

奥田懇談会の事務局は、奈良忠さんと霜田稔さんに引き継いで頂きましたが、私は、奥田東先生の“秘書官”は解任されていませんでした。木屋町の居酒屋「この芽」の常連たちと「知新会」なる会を作って、隔月くらいで飲んでいました。

今も、澤田敏男元総長と続いています。実は、澤田先生の方が、お付き合いが永いのです。大学2回生の時、馬術部の監督さんでした。

八瀬の宝嶺山荘に、サト夫人とご一緒に入っておられた奥田先生をお見舞いしたのは、1999年の春、野外保育センターのお花見の日でした。

「しっかりやってくれよ」と握られた手は、力強かったです。



空き家活用による地蔵盆の活性化！

地域再生デザイングループ生活デザインチーム／嶋崎雅嘉

アルパックニュースレター 197号「京都のまちを元気にする、空き家の再生・活用に取り組んでいます！」の記事で紹介しました、空き家再生により実現した宿屋「吉祥庵」において、8月21日に地域の地蔵盆が開催されました。

吉祥庵はオープンまでのプロセスにおいても地域の方々とコミュニケーションをとりながら事業を進め、オープン後も地域コミュニティに調和し、貢献できる施設として運営されています。今回、その一環として、地蔵盆の会場として吉祥庵が活用され



ることとなりました。

普段は宿泊者が落ち着いた空間で過ごす宿屋の居室は、射的やスマートボールの会場となり、子ども達の笑い声でいっぱいになりました。

これまで吉祥庵のある町内のお地蔵様は掛け軸に描かれたお地蔵様で、毎年役員さんの持ち回りで地蔵盆会場が設定されていたそうです。今年からは、吉祥庵が会場となったため、役員さんの負担も軽くなり、地域の方々にとっても喜ばれていました。

地蔵盆は、地域の子供たちが、地域の大人たちに見守られながら育つ、まちとして大切な伝統行事です。地蔵盆がこの地域でこれからも持続的に取り組まれることは、この地域の未来を守ることになると思います。吉祥庵がそのためのきっかけとなっているであろうことが喜ばしく思います。

空き家の活用が全国で取り組まれる中で、単純に活用が進めば良いというのではなく、空き家活用がまちの活性化や課題解決のきっかけとして作用する取り組みが広がることが重要です。

「冒険・探検・オープンアルパック！」開催しました

都市・地域プランニンググループ／依藤光代

新事務所に所員の家族を招待するイベントを、8月2日に実施しました。

30代から40代の所員の多くは現在、子育ての真っ最中です。こどもとの会話の中で、計画策定や設計などの業務について「何の仕事をしているの」と聞かれても、言葉ではうまく伝えられない



オープンアルパックのはじまり、はじまりという悩みがありました。また働き盛りの年代と重なることもあり、平日はなかなか家族とゆっくりとコミュニケーションをとることが難しいのが現状です。

そこで職場のことを実際に聞き知ってもらい、所員が一生懸命働いていることを家族に理解してもらうことを目的に、所員のこどもに事務所に遊びに来てもらいました。1歳児～未就学児4名、小学生7名の、合計11名のお子さんの参加があり、またお母さんも3名参加くださいました。

まずは、引っ越しが終わったばかりの真新しい事務所の「探検ツアー」です。たくさんのお父さんやお母さんに加え、設計のためのCAD等のツールや、10階からの眺めなど、こどもには珍しいものばかりでした。次に、所員に話しかけながらお宝を見つけていく「宝探しゲーム」をしました。「お宝カード」を握りしめ、勇気を出していろいろな所員に質問していきます。その間にも、お父さんやお母さんの仕事机にあるものをしげしげと観察したり、イスに座ってみたり、引出しを開けてみたりと、思い思いに楽しんだ2時間でした。



イベントに招待するチラシ



仕事のことを簡単に説明中

参加したこどもたちは、「働く」という普段なかなか触れる機会のない場を体感し、また普段お父さんやお母さんが一緒に働いている同僚と新しい出会いをし、思い出に残る一日になったのではないかと思います。また受け入れた所員も、事務所がいつもより賑やかになったほか、所員一

人ひとりの家庭での子育ての風景が垣間見え、刺激的な時間を過ごすことができたと思います。家族にとってより身近な職場になれるよう、今後もいろいろな企画を立てていきたいと考えています。

私見ですが、家族が応援してくれることは仕事に取り組む際の

支えにもなりますし、またさらに家族の顔が見える状態は、所員間の配慮や協力をスムーズに行うこと、つまりチーム力を高めることにつながっていくのではないかと考えています。これをきっかけに、私たちらしいワークライフバランスのとり方を考えていきたいと思っています。

きんきょう



黒くて丸くてズッシリ重い「なす」／都市・地域プランニンググループ 山崎将也（出身：新潟県）

皆さんは新潟県の名物と聞いて何を思い浮かべるでしょうか。お米、魚介類あるいは日本酒でしょうか。実は新潟は意外？にも「なす王国」でもあるのです。



うまいもの通信

新潟県

県内では約20種類のなすが栽培され、作付面積は全国一なのですが、その多くを自分たちで消費してしまうため出荷量は少なく、長らく門外不出とされてきたなすまであったりします。

今回、その中で個人的に一押しな「長岡巾着なす」をご紹介します。その名の通り、口を絞った巾着のような縦皺の入った大型の丸いなすなのですが、形が悪くなりやすく「こんげんのしょうしくで出せねえて（こんななすは恥ずかしくて外に出せない）」という理由で広域に出荷されることがなかったと言われています。

また、このなすは栽培方法が少し変わっています。長岡市はその中央に信濃川が流れ、非常に肥沃な土壌が形成されており、巾着なすも信濃川の河川敷で多く栽培されているのですが、栽培時にあまり水を与えないのがコツで、それによりなすは水を求めて強い根を張り、土壌の栄養分をたっぷり吸収するようになり、結果、果肉の詰まったズッシリ重いなすとなるのです。

さて、そんな長岡巾着なすの



最も一般的な食べ方は、まるごと蒸かして薄切りにした「蒸しなす」です。味付けもシンプルに辛子醤油か生姜醤油だけというものです。果肉が詰まっているからこそ可能な調理法で、煮くずれすることなく、なすの甘みが味わえる、長岡の夏の風物詩のひとつとなっており、これを食べないと夏が来た感じがしないものでした。

長岡巾着なすは、最近都内のスーパーなどでもたまに見かけるようになってきましたが、今回のうまいもの通信を書くにあたって、やはり地元の食べ物は地元で、「おいしい」ではなく「ばかうんめえのお」と食べたいものだ実感した次第です。

延命新地

～昭和のノスタルジックな路地を探访して

都市・地域プランニンググループ／水谷省三



JR 大阪駅から新快速で近江八幡駅まで行き、そこから近江鉄道に乗り換え、八日市駅までやってきました。行程約 90 分で到着です。

延命新地は、滋賀県東近江市の近江鉄道八日市駅の東側に面した旧市街地です。その地名からも想像できるように、かつての花街で湖東随一の繁栄した街だったようです。今の街の姿は、営業する飲食店もまばらで、店を閉めたスナックやバーの軒先看板が連なっている様子が寂しさを感じさせます。

こうした街の表情をもつ延命新地は、2～3m 程度の細い路地が入り組み特徴的な街を構成しています。一歩細い路地空間に踏み入ると、通りに面してベンガラ色の出格子をもつ町家や二階の手すり窓が特徴的な町家が現れ、

昭和初期の趣きある街並みや路地の狭さが地域の生活を間近に感じさせます。これらの町家とかつての飲み屋店舗が混在する、この地独特の昭和レトロな感じが、懐かしさを誘います。また、高密度に飲み屋があるトンネル状の路地もあります。残念ながら大半のお店は閉められており、人の姿は見られないため、通り抜ける時には、ちょっとした冒険心が湧き上がります。

延命新地の魅力は路地空間だ

けではありません。東側に面する商店街の中に、ヴォーリズの建築物が残されていたり、今も営業している延命湯という銭湯もあり、生活・文化を感じさせます。

この他、延命新地の北側の街区を占めるように、老舗料亭の招福楼本店があります。規模の大きな敷地のため道路から中の様子はうかがえませんが、通りから見るとこの料亭の表門付近は、鬱蒼とした樹木が並び砂利が敷き詰められ、あたかも庭園や寺院の中に入る印象を受けるような場所です。「日本の料亭紀行」の中でも、霜月の料亭として紹介されており、創業明治元年の格調高い料亭です。

最近、発表されたことですが、この延命新地に隣接して八日市駅の南隣りに、新たな宿泊施設（ホテル）が立地する予定です。すでに建設が始まっており、この一体の市街地活性化に期待されています。今後、このホテルの宿泊者が延命新地の路地を散策したり、飲み歩きしたりする日がくるかもしれません。



ちょっと老朽化した町家



トンネル路地のなか



アルパック(株)地域計画建築研究所

Architects Regional Planners & Associates・Kyoto

<http://www.arpak.co.jp> E-mail info@arpak.co.jp

本社

京都事務所 〒600-8007 京都市下京区四条通り高倉西入立売西町 82

大阪事務所 〒541-0042 大阪市中央区今橋 3-1-7 日本生命今橋ビル 10F

名古屋事務所 〒460-0003 名古屋市中区錦 1-19-24 名古屋第一ビル 6F

東京事務所 〒102-0074 東京都千代田区九段南 3-5-11 スクエア九段ビル 1F

九州事務所 (株)よかネット 〒810-0802 福岡市博多区中洲中島町 3-8 福岡パルビル 8F

TEL(075)221-5132 FAX(075)256-1764

TEL(06)6205-3600 FAX(06)6205-3601

TEL(052)202-1411 FAX(052)220-3760

TEL(03)3288-0240 FAX(03)3288-0221

TEL(092)283-2121 FAX(092)283-2128



この用紙は「びわ湖の森を元気にする」
kikito ペーパーを使用しています。